

2017 年度聖書の集い（第 3 回）

2017 年 7 月 12 日

桃山基督教会

<http://momoyama.hannari.com/>

古本 靖久

- 1、聖歌 482 番 「いつくしみ深き」
- 2、お祈り
- 3、聖書 ヨハネによる福音書 11 章 23 節～27 節
(新約聖書 189 ページ)
- 4、今日の内容

キリスト教のおまつり「③ お葬式」

今月は「お葬式」についてです。お葬式がなぜおまつりなのか、それは話の中で説明をしていきますが、キリスト教のお葬式に参列したことがある方は、様々な思いをもたれるようです。

今回は「お葬式」を通して、キリスト教の死の捉え方や来世への期待、またキリスト教のお葬式の特徴などについて、お話ししたいと思います。

① キリスト教にとって「死」とは？

キリスト教のお葬式で特徴的なのが、様々なところに「白」を基調とした布を使うところです。桃山基督教会では聖卓、説教台、牧師が首から下げるストール、棺の覆いなど、白いものを使用します。

桃山基督教会が属している聖公会という教派では、礼拝の種類や期節によって色を変えますが、白は「喜びをあらわす色」となっています。しかしクリスマスやイースター、結婚式が白なのはわかりますが、どうしてお葬式が白なのでしょう。

それは「死」を「新しいスタート」だと考えているからです。わたしたちの肉体は滅びたとしても、いのちは永遠に生き続けるのです。わたしたちはいのちを与えられ、神さまの元からこの地上にやってきました。そしてこの地でそれぞれの働きを終え、神さまの元へと戻っていきます。いわば「凱旋」です。だからわたしたちは「ハレルヤ」と賛美しながら、お葬式をおこなうのです。

② お葬式は何を意味するのか

ではキリスト教のお葬式では、涙は流してはいけなんでしょうか。決してそうではありません。キリスト教では死の向こう側に希望があると教えられているから、泣いてはいけないうのだという考え方は、全く違います。

わたしはお葬式の礼拝をしながら、必ずとっていいほど涙を流してしまいます。わたしは天国があることも、神さまがずっと守ってくれることも、心の底から信じています。でも悲しいんですね。昨日まで普通に話せたことも話せない。喧嘩もできない。ご飯も一緒に食べられない。その人の温もりも、存在も、何も感じるができなくなるのです。

聖書にはイエス様が涙を流す場面が出てきます。それは親しくしていた姉妹のお兄さんが亡くなったときのことでした。イエス様はその人をお墓の中からよみがえらせたのですが、その前に悲しみの涙を流されたことは、わたしたちにとっても大きな慰めだと思えます。

お葬式のすべてが、笑顔であふれるはずがありません。悲しみの涙、そして後悔の思いがそこにはあります。しかしわたしたちは涙を流しながら、いつの日かまた神さまの元と一緒に過ごせる日の希望を語り合います。そしてその人の死を悼みつつ、ご家族の上に神さまの慰めが与えられるように、いま泣いている人の涙が拭われるようにと祈るのです。

③ キリスト教のお葬式の中で大切にしたいこと

ここからは、実際にキリスト教のお葬式に参列するとき、気にしておきたいことをあげてみます。しかしこの通りにしなければ失礼だとか、怒られるということはありません。大切なのは、一緒に祈り、賛美することです。

キリスト教では、お通夜もお葬式も「礼拝」です。礼拝ですから歌を歌ったり、お祈りの言葉を唱えたりということをしていきます。簡単にいうと「参加型」です。できるだけ、最初から最後までいるようにしましょう。

服装は喪服で OK です。ネクタイも黒で大丈夫です。いわゆる香典は「お花料」と書いてお渡しします。ただし、辞退される方も多いようです。

礼拝の中で、お焼香の代わりに「献花」をおこなう場合があります。係の人にお花をもらったら、お花が自分に向くように献花台にささげます。ただしお花は亡くなった方ではなく、神さまにささげますので、お間違いのないように。

お葬式から帰るときに、清めの塩はもらいません。これは「死は穢れ」という考え方ではないからです。またご家族に「お悔み申し上げます」ともあまり言いません。それはお葬式が喜びのときだという、基本の考え方があるからです。

＜桃山基督教会での礼拝のご案内：どなたでもお気軽にどうぞ＞

日曜学校（子どもの礼拝）： 毎週日曜日 午前 9 時 30 分から

日曜礼拝： 毎週日曜日 午前 10 時 30 分から